

語構造の違いはアクセントに反映されるか

——同音語の例に基づく考察——

上野 善道

〔要旨〕同音語の例に基づいて語構造とアクセントの関係を6つのケースに分けて考察し、次の4点を明らかにする。(1)アクセント規則は語構造に依存する。(2)そのアクセントは、特に後部要素の長さやアクセント属性で決まり、その組み合わせ次第でアクセントの異同が決定される。(3)したがって、語構造の違いが常にアクセントの違いに反映されるとは限らない。(4)手元に集まった例では、アクセントの違いが現われてこない方が多い。そして最後に、(5)語構造の差がアクセントに反映される場合/されない場合のそれぞれの条件を理論的に考察し、実例からの結論を裏づける。

〔キーワード〕語構造、複合語アクセント規則、同音語、無核化型、前核化型

1 はじめに

窪菌晴夫(1993:11)に、東京方言の同音語におけるアクセントの対立例として(1)が出ている(引用に際し、無核アクセントを明示する印として^ˉを付け、カナ表記のトウを^ˉトーに変更。セイは慣例に従うが、発音は普通[セー]。’はアクセント核)。

- (1) 1a 「新生党」(シンセイ^ˉトー) 1b 「新政党」(シンセ’イトー)
2a 「神学科」(シンガ^ˉッカ) 2b 「新学科」(シンガ’ッカ)

これを氏は、それぞれ(2)のような内部構造の違いによるものとする(以下、アクセントだけを示す時は、無核型は@、有核型は核の位置を丸付き数字で置き換える)。

- (2) 1a [[新生]党]@ 1b [新[政党]]③
2a [[神学]科]@ 2b [新[学科]]③

a)の語例が「党」や「科」という1～2拍からなる「平板化形態素」(以下、本稿

では「無核化形態素」)をもっているのに対し、b)の語例が「政党」「学科」という(2形態素からなる)3拍以上の単語を含んでおり、その違いに応じて適用される複合語アクセント規則が異なる結果、別のアクセントになるとする。単純に最終形態素で決まるものではなく、内部構造が関与するという説で、妥当な説明と考える<1>。

しかるに一方で、(3)のように、(2)と同じ構造と見られるにもかかわらず、その語構造の違いがアクセントの違いとして出ていない例もあるという(窪菌1995:28。[]と④のアクセントは引用者)。

(3) [[お食事]券]④ [汚職[事件]]④

これとはおそらく独立に、川上夔(1994:4)は(4)の例をあげ、「この場合、語構成の異なりがアクセントに反映する」と書いている<2>。表記の仕方は異なっても、(2)の1)と同じ区別である。

(4) 「新進・党」@ 「新・新党」③

ここで「この場合」と断っているのは、「結果として語構成を反映しない」

(5) 「小文・集」③ 「小・文集」③

のような例も思いついたからであるという(1995.1.14付けの私信。③のアクセントは引用者が付した。この「小文集」という単語は川上1994:33に出ている)。

以上をまとめると、語構造(語構成、内部構造)とアクセントの関係において、

(6) 1) 語構造の違いに伴ってアクセントも違ってくるもの--(1)(4)

2) 語構造の違いがアクセントの違いに反映されないもの--(3)(5)

の2つがある、ということになる。

本稿は、語音(分節音、アクセント以外の音声)が事実上同音の例を材料としながら、(6)の1)と2)のどちらが一般的なものか、また、どのような条件のときに語構造の差がアクセントの差に反映されるかを明らかにしようとするものである<3>。

2 同音語・語例・表記

考察対象は、アクセントを除いた語音が同音の語例とする。理論的に言えば、同音語でなければ「語構造とアクセントの関係」を明らかにできないというものではない。そういう中で同音語を正面に据えるのは、語音を一定にすることにより、アクセント自体の異同とその働きが端的に示されるようにするためである。

ただし、同音語とは言っても、連濁形・連半濁形・ガ行鼻音(鼻濁音)・促音形などの違いを含めた「拡張同音語」の形で取り上げる。これらの語音特徴が語構造(あるいは結合の度合い)の違いを反映するので、それらの異同も広義の同音語の中を含めて扱う方が考察が深まると考えるからである<4>。これらは本来は同音語で、それが語構造の違いで異なっているものと見なすのである。

「ガ行鼻音」に関して言えば、窪園晴夫氏はこれを問題にせず、(1)の2)のようにすべて「ガギグゲゴ」で表わしている。現在の東京の状態から考えて、また氏の出身地から考えて、それなりに当然とも言える処置である。しかし、[ŋV](Vは母音)をはっきりもっている人の場合、前述のように、[ŋ]/[g]が語構造の差を反映することがあるので、本稿ではガ行鼻音の[ŋV]を「カ°キ°ク°ケ°ゴ°」で表記し、「ガギグゲゴ」は[gV]だけを表わすものとする。

この区別を取り入れると、(1)の2)は(7)のように語音面でも区別される。「神学科」は促音化しない形もあるのでそれも併記する。促音形の方が「科」との結合が密で、シンカ°クカの形は「学」と「科」の結合がゆるいことを示している。なお、「進学科」も「神学科」と同じであろう。

- (7) a シンカ°ツカ~シンカ°クカ⁻(神学科) b シンガ' ツカ(新学科)
 /siNŋaQka~siNŋakuka⁻/ /siNga'Qka/

本稿の具体的な語例は、ワープロのかな漢字変換中に起きた“誤変換”をきっかけに集めたものが多い<5>。一部は私のアクセントデータベースから取り、一部は人為的に作り出した。掲載にあたり、例が多い場合、同一のパターンに属すると見られるものは適宜省いた。対をなす単語の最終形態素が同一の方が一層明瞭な対比になるが、(3)の例にならい、必ずしもそれにはこだわらない。

これらの対の中には、現実に使われたことのないもの、使うことのなさそうなものも含まれる。その意味ならもっと普通の単語/表現が別にある、というものもある。しかしそれは、今の考察にとって大きな問題ではない。(普)・(希)などの使用状況の

記述も必要ではあるが、ここでのもっと大事なポイントは、その意味で使う用法があるとした場合、それに応じて一定のアクセントが予測でき、それが多くの人において一致するという点である。アクセント規則が生きていて、きちんと働いている証拠があり、それに基づいて論が立てられればそれで十分である。

あまりに特殊な例はともかくとして、普通に使うはずの自然なものであっても、辞書に載っている該当語例は少ない。特にペアがそろって掲載されている語例は、残念ながら、アクセント辞典でさえ皆無に近い状態である。そのため、本稿のアクセントデータは、一部は辞書を参照したものの、大部分をインフォーマントに依った<6>。

辞書の見出し語を使って同音語におけるアクセントの弁別力を調べようとする方法があるが、本稿はそれに対する1つの補充情報になるものとする。上に述べたように、この後に取り上げるペアは、辞書の見出し語になることがまずないからである。この点に、同音語にこだわったもう1つの理由がある。

複合語は内部的に2要素からなる構造をもつという前提に立つ。複合語の内部構造の表記は、その最も大きな切れ目を境界記号「+」で示す。そして、「+」の前後を「前部要素」「後部要素」と呼び、それぞれ「X」「Y」とも表わす。XやYの内部がさらに小さな要素に分かれることがあるが、今それは問題としない。複合語内部のアクセント単位の切れ目が問題となる場合は「|」で示す。

語音と一緒に記す時のアクセント表記で、1単位の中に複数の印が付いているのは、2つ(以上)のアクセントの併用をまとめて記したものである。丸付き数字の場合の併用は、数字をそのまま並べる。

複合語には、アクセント的に「1単位形」のもの「2単位形」のものがあるが、本稿では1単位形を中心に扱う<7>。中でも、2拍以下の「短い形」になる場合と、Yが3拍以上の「長い形」になる場合との異同に焦点を当てる。

以下、次の6つのケースに分けて考察を進める。

- 1) 語音は同じで、語構造によりアクセントが異なる例(3節)
- 2) 語構造によりアクセントが異なる上に、語音も変わる例(4節)
- 3) 語構造が違って、アクセント・語音とも同じ例(5節)
- 4) 語構造の違いが語音には反映されるが、アクセントは同じ例(6節)
- 5) 語構造は同じなのに、アクセントが違っている例(7節)
- 6) 語構造もアクセントも同じ例(8節)

3 語音は同じで、語構造によりアクセントが異なる例

最初に、(1)の1)「新生党/新政党」と同じ、ないし類似のグループに属するものを(8)に例示する。以下、縦にa,bのペアで並べる。

(8) 単語	構造	語音・アクセント
1a 細分化	:[細分+化]	サイブンカ ⁻
b 再分化	:[再+分化]	サイブ'ンカ
2a 成文化	:[成文+化](「成分化」も)	セイブンカ ⁻
b 性文化	:[性+文化](「性分化」も)	セイブ'ンカ
3a 西洋語	:[西洋+語](言語, 単語)	セイヨーコ ⁻
b 性用語	:[性+用語]	セイヨ'ーコ ^o
4a 二時間後	:[二時間+後]	ニジカンコ ⁻
b 二字漢語	:[二字+漢語]	ニジカ'ンコ ^o
5a 神経性	:[神経+性](病気)	シンケーセー ⁻
b 新京成	:[新+京成](私鉄名)	シンケ'ーセー
6a 生態系	:[生態+系]	セитайケイ ⁻
b 聖体系	:[聖+体系](教義などの)	セイト'イケイ
7a 日本文化	:[日本文+化](邦文訳)	ニホンブンカ ⁻
b 日本文化	:[日本+文化]	ニホンブ'ンカ
8a 入学費用	:[入学費+用](用途)	ニューカ ^o クヒヨー ⁻
b 入学費用	:[入学+費用]	ニューカ ^o クヒ'ヨー
9a オートメ化	:[オートメ+化]	オートメカ ⁻
b オートメカ	:[オート+メカ]	オートメ'カ
10a 不感症	:[不感+症]	フカ'ンシヨー ⁻
b 不干涉	:[不+干涉]	フカ'ンシヨー
11a 毎日用	:[毎日+用](用途)	マイニチヨー ⁻
b 毎日曜	:[毎+日曜]	マイニチヨ'ー ⁻

これら(8)の各ペアのアクセント対立は、いずれも複合名詞アクセント規則によって説明できるものとなっている。

1)から8)までは、Yがa)は1~2拍の「無核化形態素」、b)は3~4拍の単語からなるもので、それぞれに複合語アクセント規則が適用された結果、a)は自ずと無核に

なり、b)はYの1拍目に核が現われる(詳細は10節を参照)。9)も、b)のYは2拍語ながら2音節の外来語ゆえにこれに準ずる。

10)11)はこれとはやや異質で、対立がある場合とない場合とがあるが、それぞれに理由がある。10)は、古くは「-症」が前核化型(後述)のため a)b)とも同じ②型であったが、「-症」の@型化に伴い、若い人ほどこのペアを区別する傾向が強くなっている。この区別はかなり定着しつつあると見て(8)に入れた。11)の「用」は無核化型であるが、b)の「日曜」は単独形で@と③の両型があり、その③型の時に対立が生じている。(@では同形に。「毎」はYが@の時の振る舞いが一般のXとは異なる。)

次は、(1)とは別のパターンであるが、やはり対立のある例を(9)に示す。

(9)1a	語彙史	: [語彙+史]	ゴイ' シ	
	b	基石	: [碁+石]	ゴイシ ⁻
2a	医師団	: [医師+団]	イシ' ダン	
	b	石段	: [石+段]	イシダン ⁻
3a	ガラス器	: [ガラス+器]	ガラス' キ	
	b	がら空き	: [がら+空き](乗り物)	ガラスキ ⁻
4a	語彙論	: [語彙+論]	ゴイ' ロン(近年@も聞く)	
	b	ご異論	: [ご+異論]	ゴイロン ⁻
5a	除湿器	: [除湿+器]	ジョシ' ツ' キ(無声化が関与)	
	b	助詞付き	: [助詞+付き](~で発音)	ジョシツキ ⁻
6a	靈異記	: [靈異+記](書名)	リョーイ' キ	
	b	領域	: [領+域]	リョーイキ ⁻ , リョ' ーイキ
7a	慎重さ	: [慎重+さ]	シンチョーサ ⁻	
	b	新調査	: [新+調査]	シンチョ' ーサ (cf.「身長差」)
8a	婦人科医	: [婦人科+医]	フジンカ' イ	
	b	婦人会	: [婦人+会]	フジ' ンカイ(最近は@もか)

(9)の1)から6)までのa)は、Yがすべて1~2拍の「前核化(pre-accenting, 前アクセント)形態素」で、その直前の拍(すなわちXの末尾)に核を置く性質をもつ。5aは無声化がからんで核を1拍前にずらしている人もある。

それに対してb)は、Yがいずれも「それ以外」の要素からなる。種々のものがあるが、Yが「短い」動詞連用形の場合、Xを目的格とすること・もの・人を表わさない

かぎり、@型が原則。XもYも本来の名詞で「短い」ものは、辞書レベルで与えられていると見た方がよさそうである。(8)と違い、Yが3拍以上の例が得られていない。4)はYが3拍であるが、接頭辞「こ」が@型に付いて@型で出る、別のタイプである。

なお、4aの「-論」は、近年無核化する傾向が見られる(「意味論」@など、Xが短いところで変化が進んでいるか)。その場合、4)のペアはアクセントも同じになる。先の「-症」と似るが、「-論」の方が始まったばかりの変化と見られるので(9)に入れた。「-会」も「二次会、読書会、研究会、懇親会」など@型が普及しつつある。

7)は、a)はXの核の有無に準じて変わる性質をもつ接尾辞の「さ」を含み、「慎重」の@型に応じて@型となっている。同じ[4+1]の構造でも、「身長差」では「差」が前核化型ゆえb)と同じ③型になることに注意。b)は(8)の一般パターンである。

8)は、a)b)ともに前核化形態素をYにもつが、そのYの拍数の差が全体のアクセントの差となり、b)では指定された核の位置が特殊拍ゆえにさらに1拍前にずれ、a)との差が一層大きくなっている。短い前核化型どうしの間で対立している例である。

4 語構造によりアクセントが異なる上に、語音も変わる例

(10)に上げたのは(1)の2)の「神学科/新学科」に類するもので、アクセントに加えて分節音まで変わり、構造の違いが一層はっきりしている例である。アクセントに関しては(8)と同じで、a)は無核化型の「科、屋、本」がYに立っている。

(10)1a 器楽科：[器楽+科]	キカ° ッカ ⁻ (~キカ°クカ ⁻)
b 貴学科：[貴+学科](そちらの)	キガ' ッカ~キ' ガッカ ⁻
2a 数学科：[数学+科](「数学家」も)	スーカ° ッカ ⁻ (~スーカ°クカ ⁻)
b 数学科：[数+学科](幾つかの)	スーガ' ッカ
3a 新本屋：[新本+屋](~と古本屋)	シンボンヤ ⁻
b 新本屋：[新+本屋]	シンホ' ンヤ
4a 新刊本：[新刊+本]	シンカンボン ⁻
b 新刊本：[新+刊本](cf.写本)	シンカ' ンボン

1)と2)はガ行鼻音で、3)以下は連半濁形で、それぞれ「器楽、数学；新本、刊本」が密な結合をして構成要素となっていることを示している。-ボンと-ボンと-ホンで「本」の結合機能が表示されている。ここでも「新新党」などにならない、仮に「新しい新本」ならシンシ' ンボンで、新進党が古写本を所蔵していればシンシンボン⁻と

なるであろう。キカ°クカ、スーカ°クカの形については(7)の説明を参照。1bの接頭詞「貴」はアクセント的に独立する傾向がある。

5 語構造が違っても、アクセント・語音とも同じ例

しかしながら、以上のケースとは異なり、構造の差がアクセントに関係してこない複合語も多い。というより、これまで集めた例では、この方がはるかに多いのである。

すなわち、

(11)のように、実質的に同じ意味をもちながら両様に切れる（あるいは、どちらで切れるのか分からない）場合、

(12)のように、切り方によって意味がはっきり異なる場合、

(13)のように、最初から切り方が違っている別の単語の場合、

のいずれにおいても同じ結果になり、アクセントに何ら違いが出てこない例がこれに該当する。本節では、語音にも違いが出ないものを取り上げる。

最初は、“同じ単語”が2通りの構造に解釈でき、しかも実質上意味の差がない場合である。(11)に示すように、どちらに取ろうとアクセントは同じになる。

(11)1a	赤紫色	:[赤紫+色]	アカムラサキイロ ⁻	
	b	赤紫色	:[赤+紫色]	アカムラサキイロ ⁻
2a	応援団長	:[応援団+長]	オーエンダ'ンチョー	
	b	応援団長	:[応援+団長]	オーエンダ'ンチョー
3a	自治会館	:[自治会+館]	ジチカ'イカン	
	b	自治会館	:[自治+会館]	ジチカ'イカン
4a	自治会長	:[自治会+長]	ジチカ'イチョー	
	b	自治会長	:[自治+会長]	ジチカ'イチョー
5a	国文学	:[国文学+学](~と国語学)	コクブ'ンカ°ク	
	b	国文学	:[国+文学](~と米文学)	コクブ'ンカ°ク
6a	日曜日	:[日曜日+日](~と休刊日)	ニチヨ'ーピ	
	b	日曜日	:[日+曜日](~と月曜日)	ニチヨ'ーピ
7a	寺子屋	:[寺子+屋]	テラコヤ ⁻	
	b	寺小屋	:[寺+小屋]	テラコヤ ⁻

挙例は一部にとどめたが、該当例は多くある。データベースの作成にあたり、その境界(boundary)設定で最も困ったのがこのケースである。「赤紫色」をどう切るか——どちらと見ても事実上同じ——、「国文学」の切れ目はどうするか——対比・連想する語形により影響を受ける——という問題に何度も突き当たったのであった<8>。

2)~4)のタイプは、あたかも、「応援団団長」→「応援団長」等の「共時的な重音脱落(haplology)」を思わせるものがある。

(11)のペアに接すると、複合語における「XY 2分説」自体の再検討も意識せざるを得なくなるが、2分説を取ったいずれの場合でも、まったく同じアクセントになることは、複合名詞アクセント規則から完全に予測することができる。

すなわち、2拍のYである「色」は、結合相手が複合語の「赤紫」であろうと単純語の「紫」であろうと、すべて無核型に統一してしまう性質をもつ(後者を、一度複合語化したYはより上位の複合語の中にもう一度埋めこまれてもそのアクセント--ここは@--を保持して全体のアクセントは@型となる、としてもよい)。

また、「団長、会館、会長、文学」など4拍のYは-O'○○○、「曜日」など3拍のYは-O'○○となる。一方の「長、館、学、日」などは前核化タイプでその直前の拍に核を置く(「学科'長」や「映画'館」などを参照)が、そこが特殊拍(モーラ音素=のばす音、はねる音、つまる音、二重母音の後半のイ)の場合、それらの弱い音は原則として核を担えずに1拍前にずれる結果、これも両者は同じ形になる。

これらのY自体(「会館、会長、…」)は、アクセント的に複合語とは見なされない。複合語規則を適用してできた単語ではなく、最初からこの形で与えられたものと見なす。例えば、「会館」が「館」の前核化による*カ'イカンではないことに注意。

7bは有名な“誤字”の例であるが、これが生ずる背景には、「寺子」が死語であることに加え、「小屋」でも同じアクセントになることが作用しているものと考えられる。

次の(12)は、同じ文字列で、構造によりはっきりと意味が異なるが、アクセントはまったく同じという例である。(5)の「小文集」に相当する例で、「短文集、長文集」などの類例も作ることができる。

- | | | | | |
|--------|-----|---------|-------------|-----------|
| (12)1a | 小論集 | :[小論+集] | シヨ-ロ'ンシュー | |
| | b | 小論集 | :[小+論集] | シヨ-ロ'ンシュー |
| | 2a | 新人類 | :[新人+類](類い) | シンジ'ンルイ |
| | b | 新人類 | :[新+人類] | シンジ'ンルイ |

- | | | |
|--------|---------|-----------|
| 3a 名文集 | :[名+集] | メイブ' ンシュー |
| b 名文集 | :[名+文集] | メイブ' ンシュー |

(11)の2)~6)と同じ理由で、(12)の各対は同一アクセントになることが説明できる。語末から数えて3拍目が特殊拍からなる例ばかりである。ただし、2aはあまりなじみがない単語のために、シンジン' ルイかと内省する人はあろう。複合度のゆるい形である<9>。

本節の最後は、(13)として語構造が異なる別語のペアを取り上げる。

- | | | |
|------------|-----------------|-------------------|
| (13)1a 遺伝子 | :[遺伝+子] | イデ' ンシ |
| b 異電子 | :[異+電子] | イデ' ンシ |
| 2a 雇用時 | :[雇用+時] | コヨ' ージ |
| b 小楊枝 | :[小+楊子] | コヨ' ージ |
| 3a 試験紙 | :[試験+紙] | シケ' ンシ |
| b 四剣士 | :[四+剣士](4人の) | シケ' ンシ |
| 4a 書道史 | :[書道+史] | シヨド' ーシ |
| b 所動詞 | :[所+動詞](能動詞と~) | シヨド' ーシ |
| 5a 相似比 | :[相似+比](「掃除費」も) | ソージ' ヒ |
| b 総慈悲 | :[総+慈悲] | ソージ' ヒ |
| 6a 後継機 | :[後継+機](機種) | コーケ' イキ |
| b 好景気 | :[好+景気] | コーケ' イキ |
| 7a 書記官 | :[書記+官] | シヨキ' カ' ン(無声化が関与) |
| b 諸器官 | :[諸+器官](「諸機関」も) | シヨキ' カ' ン(無声化が関与) |
| 8a 書誌料 | :[書誌+料](「書誌量」も) | シヨシ' リョー |
| b 諸資料 | :[諸+資料](「諸史料」も) | シヨシ' リョー |
| 9a 原子量 | :[原子+量] | ゲンシ' リョー |
| b 原資料 | :[原+資料] | ゲンシ' リョー |
| 10a 好感度 | :[好感+度](タレントなど) | コーカ' ンド |
| b 高感度 | :[高+感度](カメラ) | コーカ' ンド |
| 11a 講師料 | :[講師+料](「講師寮」も) | コーシ' リョー |
| b 好資料 | :[好+資料] | コーシ' リョー |

12a 講談師	: [講談+師](「講談史」も)	コーダ' ンシ
b 好男子	: [好+男子]	コーダ' ンシ
13a 充電器	: [充電+器]	ジューデ' ンキ
b 重電機	: [重+電機](~と軽電機)	ジューデ' ンキ
14a 全盛期	: [全盛+期]	ゼンセ' イキ
b 前世紀	: [前+世紀](「全世紀」も)	ゼンセ' イキ
15a 走行費	: [走行+費]	ソーコ' ーヒ
b 総工費	: [総+工費]	ソーコ' ーヒ
16a 装置名	: [装置+名]	ソーチ' メイ
b 総地名	: [総+地名]	ソーチ' メイ
17a 反省記	: [反省+記](「反省期」も)	ハンセ' イキ
b 半世紀	: [半+世紀]	ハンセ' イキ
18a 不敬罪	: [不敬+罪]	フケ' イザイ
b 不経済	: [不+経済]	フケ' イザイ
19a 不凍港	: [不凍+港]	フト' ーコー
b 不登校	: [不+登校]	フト' ーコー
20a 寮歌祭	: [寮歌+祭]	リョーカ' サイ
b 寮火災	: [寮+火災]	リョーカ' サイ
21a 懐旧談	: [懐旧+談]	カイキュ' ーダン
b 下位球団	: [下位+球団]	カイキュ' ーダン
22a 海潮音	: [海潮+音](訳詩集)	カイチョ' ーオン
b 開長音	: [開+長音](~と合長音)	カイチョ' ーオン
23a 進行相	: [進行+相](文法)	シンコ' ーソー
b 新構想	: [新+構想]	シンコ' ーソー
24a 生産業	: [生産+業]	セイサ' ンキ°ヨー
b 性産業	: [性+産業]	セイサ' ンキ°ヨー
25a 直音説	: [直音+説](学説)	チョクオ' ンセツ
b 直音節	: [直+音節](~と拗音節)	チョクオ' ンセツ
26a 何分説	: [何分+説](何分するかの説)	ナンブ' ンセツ
b 何文節	: [何+文節](いくつの)	ナンブ' ンセツ
27a 現在量	: [現在+量]	ゲンザ' イリヨー
b 原材料	: [原+材料]	ゲンザ' イリョ' ー

28a 語法上	:[語法+上]	ゴホージョー ⁻
b ご芳情	:[ご+芳情]	ゴホージョー ⁻
29a 能楽師	:[能楽+師]	ノーカ°' ク' シ(無声化が関与)
b 農学士	:[農+学士]([農学+士]?)	ノーカ°' ク' シ
30a 最高級	:[最高+級]([最+高級]?)	サイコ' ーキュー
b 最高給	:[最+高給]([最高+給]?)	サイコ' ーキュー

語構造の違う中ではこれが最も採集例が多いので、短くて異質の「お粥/陸湯(風呂の) (@)などは省いた。1)から27)までのa)は、いずれもYに「前核化形態素」をもつ。その位置が特殊拍の場合は1拍前に核がずれる。7aは、人によっては無声拍にも核を置かない。その場合、核の移動は境界(+を越えないのが原則であるが、前に移ると最も有標の①型になるのでこれを避け、1拍後に移ったものが③型である。

対するb)の1)から26)までは、Yが2字漢語の「慈悲」を含めすべて「長い形」で①か@なので、複合語ではその1拍目に核がくる(「掃除機」に対する「総磁気」も同様)。7bは、無声化が関与してYの2拍目に核がくることもある。これは「器官」単独形にも当てはまるが、若い世代では無声拍に核を置く[キ.' カン]も定着しつつある。また、[キ.カ' ン]でも[-キ.' カン]となる傾向は古くからある。27)のみ、「材料」が語中核の③型ゆえにゲンサイリョ' ーともする人がある。

28)はこれらとは異質で、「上」は無核化型であり、接頭辞「ご」も@型のYにつくと無核になる結果、@型で同じアクセントになっている。

29)と30)は、「師」は明らかに前核化型で、無声拍に核を置かないタイプの人はさらに1拍前にずらす。それに対して「農学士」は(さらには「最高級」「最高給」も)上のように分析したものの、その語構造の認定自体が問題となるかもしれない。(13)の例以外では、「進学+校」に対する「神学校」などもその可能性がある。「文学士」などとともに、これら自身が(11)の対象となるものである。その認定次第では、これらのペアが別のところで扱われる可能性も残されている。

アクセントだけから判断した場合、単独の「学士」が②型でない限り、ノーカ°ク' シは[農学+士]であることを示すが、ノーカ°' クシでは、[農+学士]と、[農学+士]の無声化によるずれとの両方の可能性があり、決定できない<10>。

6 語構造の違いが語音には反映されるが、アクセントは同じ例

次の(14)は、構造が違い、その差が分節音の[ŋ]/[g]に現われているが、やはりア

クセントには何ら違いが反映されていない例である。「進学校/新学校」など、類例を追加することもできる。b)の前部要素が、やや独立性のある、限られたものになる傾向が見られるが、それは正に構造に関係している事柄である。

(14)1a	参議院	:[参議+院]	サンキ°' イン	
	b	三議員	:[三+議員](3人の)	サンギ' イン
2a	侵害者	:[侵害+者]	シンカ°' イシャ	
	b	新外車	:[新+外車]	シンガ' イシャ(cf.新会社はカ°)
3a	審議員	:[審議+員]	シンキ°' イン	
	b	新議員	:[新+議員]	シンギ' イン
4a	審議官	:[審議+官]	シンキ°' カン	
	b	新技官	:[新+技官]	シンギ' カン
5a	数学者	:[数学+者]	スーカ°' ク' シャ(無声化が関与)	
	b	数学者	:[数+学者](数人の)	スーガ' クシャ
6a	日本語学	:[日本語+学](~と日本語論)	ニホンゴ°' カ°ク	
	b	日本語学	:[日本+語学](~と日本文学)	ニホンゴ' カ°ク

アクセントについては、a)の「院，者，員，官，学」が前核化型であることだけを言えば十分であろう。ただし、5aの「者」の前核化性を「ク」の無声化よりも優先させるタイプの人には、5bとはアクセントも異なることになる。

ガ行子音に関しては、b)の系列は単独形でも[g]の形をもち、かつその前に切れ目(+)があるものばかりである。同じ構造でも「新+会社」など、単独形で[k]のものは[ŋ]でa)と同じになる。6)は、a)でも[-ŋŋoŋaku]の発音しにくさを嫌って[-ŋgoŋaku]にしている可能性もあり、-ゴカ°クの発音だけから直ちにb)とは決められないようである。

以上、本稿の中心となる「語構造の違うペア」を取り上げてきたが、その補足として、「同じ語構造」でアクセントが異なる対の場合(7節)と、アクセントも同じ場合(8節)を簡単に見ておく。

7 語構造は同じで、アクセントが違っている例

語構造が同じなのに、アクセントの違っている例が(15)である<11>。

(15)1a 天皇制 : [天皇+制]	テンノーセイ ^ー
b 天王星 : [天王+星]	テンノ'ーセイ ^ー
2a 向光性 : [向光+性]	コーコーセイ ^ー
b 高校生 : [高校+生]	コーコ'ーセイ
3a 南海線 : [南海+線](私鉄名)	ナンカイセン ^ー
b 何回戦 : [何回+戦](試合)	ナンカ'イセン
4a ご静聴 : [ご+静聴]	ゴセイチョー ^ー
b 語声調 : [語+声調]	ゴセ'イチョー
5a 成人式 : [成人+式](やり方)	セイジンシキ ^ー
b 成人式 : [成人+式](式典)	セイジ'ンシキ
6a 一年生 : [一年+生](植物)	イチネンセイ ^ー
b 一年生 : [一年+生](生徒・学生)	イチネ'ンセイ

1)~3)のペアは、Yのアクセント属性の差によって生じている対立である。同じ内部構造の例であっても、異なる構造の場合と同様、後部要素Yの属性如何でアクセントに違いが出ることに注意したい。なお、1bの新しいアクセントは@型で、1aと区別がなくなっている<12>。テンオーセイと発音する人もある。

4)は「ご」の特殊パターンと一般の複合語パターンとによって生じた対立例である。

5)と6)は、形態素の意味が絡んでくる特殊な例で、すでによく知られている。6aの実際例は現実世界では限られているが、仮に「4年生の植物は生物学的にありえない」といった文を発するときでも、該当箇所は@型で動かないことに注意されたい<13>。なお、若い世代では6bも6aと同じ@型に言う人があるらしい。

8 語構造もアクセントも同じ例

これは当たり前とも言えそうであるが、実例によって確認をしておく。(16)を参照。

(16)1a 寄生虫 : [寄生+虫]	キセイチュウ ^ー
b 帰省中 : [帰省+中]	キセイチュウ ^ー
2a 交換器 : [交換+器]	コーカ'ンキ
b 校勘記 : [校勘+記](諸本の~)	コーカ'ンキ
3a 公使館 : [公使+館]	コーシ'カン
b 講師間 : [講師+間](~の差)	コーシ'カン

4a 厚生費	：[厚生+費]	コーセ' イヒ
b 構成比	：[構成+比]	コーセ' イヒ
5a 喉頭化	：[喉頭+化](音声)	コートーカ ^ー
b 高等科	：[高等+科]	コートーカ ^ー
6a 新出語	：[新出+語]	シンシュツコ ^ー
b 進出後	：[進出+後]	シンシュツコ ^ー
7a 新生児	：[新生+児]	シンセ' イジ
b 申請時	：[申請+時]	シンセ' イジ
8a 星条旗	：[星条+旗]	セイジョ' ーキ
b 清浄器	：[清浄+器]	セイジョ' ーキ
9a 制動機	：[制動+機]	セイド' ーキ
b 青銅器	：[青銅+器]	セイド' ーキ
10a 太閤記	：[太閤+記]	タイコ' ーキ
b 対抗機	：[対抗+機](機種)	タイコ' ーキ
11a 中世史	：[中世+史]	チューセ' イシ
b 中性子	：[中性+子]	チューセ' イシ
c 中性紙	：[中性+紙]	チューセ' イシ
12a 電機大	：[電機+大](大学)	デンキダイ ^ー
b 電気代	：[電気+代]	デンキダイ ^ー
13a 登記料	：[登記+料]	トーキ' リョー
b 投棄量	：[投棄+量]	トーキ' リョー
14a 入門期	：[入門+期]	ニューモ' ンキ
b 入門機	：[入門+機](パソコンなど)	ニューモ' ンキ
15a 甲種系	：[甲種+系](～と乙種系)	コーシュケイ ^ー
b 絞首刑	：[絞首+刑]	コーシュ' ケイ ^ー
16a 和語同士	：[和語+同士](～結びつく)	ワゴ ^ド ' ーシ
b 和語動詞	：[和語+動詞]	ワゴ ^ド ' ーシ

予想通り数が多く、200組あまりが得られたので、5拍語の中からごく一部を掲げた。14)のようにXは同じでYだけが異なるペアを探せば、さらに例が増えるはずである。Yのアクセント上の振る舞いが共通するペアであればそれでよい。「講演会/後援会」のようにYが同一のペアは、同一のアクセントになることは明らかなので、

最初から省いてある。

(16)では、15)のみ、Yの「刑」が無核化と前核化の2種類のアクセントを取る。それが前核のときは15)のペアは対立をなし、厳密には(16)の枠から外れる。

9 実例による考察のまとめ

以上の考察から、取り上げた例におけるアクセントの異同は、すべて複合語アクセント規則で説明がつくものであることが分かった。まとめると次のようになる。

「語構造（内部構造、切り方）」に応じて複合語アクセント規則が適用されるが、語構造の違いがアクセントの違いとなるか否かは、個々の規則、特に後部要素Yのアクセント属性がカギを握っており、語構造の違いが必ずアクセントの違いに反映されるとは言えない。のみならず、集められた例に基づく限り、語構造がアクセントに反映される例は多くなく、違う構造でも同じアクセントになる方が一般的である。

念のために、本稿で取り上げた諸タイプのペア数を数えると(17)のようになる。ここに、×は異なる、○は同じ、の意。もとよりサンプルに過ぎないが、構造が異なるものの中では3)が最多で、典型の30例だけでも1)と2)の合計を上回る。しかも、1)や2)に比べて、語例自体も自然なものが多い。

(17)	構造	語音	アクセント	例示ペア数	本論の該当節
1)	×	○	×	11+8=19	3
2)	×	×	×	4	4
3)	×	○	○	7+3+30=40	5
4)	×	×	○	6	6
5)	○	○	×	6	7
6)	○	○	○	16(その他多数)	8

10 理論的に見た対立の可能性

注5にも述べたように、これらの同音語の例を探すのはある程度偶然に左右される仕事で、それだけに基ついで結論を出すのは危険が伴う。そこで、最後に、語構造の違いがアクセントの対立となる可能性を理論的に検討してみることにする。

具体的には、その内部構造が、

(18) (A)Yが短い場合(2拍以下) (B)Yが長い場合(3拍以上)

の形で異なる対において、アクセントの異同の可能性を考えてみる。

それに先立ち、両タイプの可能な型、あるいはその制限をあげておく(詳しくは近刊拙論参照)。(A)には(19)のn+1の可能性があり、形態素ごとにそのどれを取るかが決まっている<14>。前核化で指定された位置が特殊拍の場合を「特」、自立拍の場合を「自」と略して付け加える。(19)の表記はYとそれに先立つ部分を示したもので、Mは特殊拍、Oは自立拍(非特殊拍)、○は任意の拍、・はXとYの切れ目を表わす。無声拍は取り上げない。'・と・'の順序は無意味であるが、(20)との比較対照のために'・を使う。これらをYとしてできあがる複合名詞のアクセントを、後ろからの逆算指定(マイナス表記)でまとめて右端に記した。

(19)	A1(Y=1)	A2(Y=2)	複合名詞
1)	無核化型 (…○・○ [¯])	無核化型(…○・○○ [¯])	: @型(無核型)
2)	前核化型自(…○'・○)	頭核化型(…○・○'○)	: -②型(次末核型)
3)	前核化型特(…○' M・○)	前核化型自(…○'・○○)	: -③型(前次末核型)
4)		前核化型特(…○' M・○○)	: -④型(前前次末核型)

(B)の複合名詞には(20)のn-1の型がある。原則的に語末核や無核の例はない(複合動詞からの派生名詞は除く。5拍以上のYも、それ自身がほとんど複合語になるので別扱いとする)。各型を作り出す単独形のアクセント型も、一通り括弧内に示した。

(20)	B3(Y=3) 単独形	B4(Y=4) 単独形	複合名詞
1)	-○○'○ (②)	-○○○'○ (③)	: -②型(次末核型)
2)	-○'○○ (@,①,③)	-○○'○○ (②)	: -③型(前次末核型)
3)		-○'○○○ (@,①,④)	: -④型(前前次末核型)

(19)と(20)を組み合わせると、違う構造で同じアクセントになるのは(21)の場合となる。「A/B」の他、A同士、B同士でもペアがあれば同アクセントになるはずである。

(21)	A1	A2	B3	B4	複合名詞
1)	前核化型自	頭核化型	-○○'○	-○○○'○	: -②型
2)	前核化型特	前核化型自	-○'○○	-○○'○○	: -③型
3)		前核化型特		-○'○○○	: -④型

一方、「A/B」の語構造の違いがアクセントの違いとして現われるのは(22)の組み合わせの場合である。両者に共通の音節配列構造がありうる場合に限定する<15>。Bに無核型がない以上、Aが無核化形態素であれば、Bの型(-②,-③,-④)をとわず別のアクセントとなる。

(22)	A1	A2	Bの型	B3単独形	B4単独形
1)	無核化型	無核化型	任意		
2)		前核化型自(B4とでは特も)	-②型	(②)	(③)
3)	前核化型自	頭核化型	-③型	(@,①,③)	(②)
4)	前核化型自	頭核化型,前核化型自	-④型		(@,①,④)

さて、(21)と(22)を比較してみると、語構造の違いがアクセントの違いとして現われる方に該当する型が多くある。これは、9節で実例から得た結論と相反するように見える。しかし、これは対立しうる型の組み合わせの種類だけを見てのことであって、その実質を考えれば、9節の結論に反するものではないと考える。

頻度を見ると<16>、まず「長い形」のB3, B4では、-O' OO, -O' OOOが圧倒的に多く(「一般型」)、それ以外の型は事実上Yがすでに複合語の場合である。特に、同音語の大部分を占める漢語語彙では、後部要素が単純語相当の場合、B3は-O' OO, B4は-O' OOOだけと言ってもいい状態である。

次に、「短い形」のA1, A2は、前核化型が大半を占め、無核化型と頭核化型は少ない。漢語ではこの偏りが顕著になり、2拍2字漢語を除けば<17>、頭核化型はなくなってしまふと言ってよい。2拍1字漢語(形態素)は、単独形を言えば①型であっても、後部要素としては頭核化型にならず、前核化型ないし無核化型となるのである。ここでも前核化型の方が多い。そして、前部要素Xの末尾も、漢語においては特殊拍が多数を占めるので、「前核化型特」の頻度がもっとも高くなる。特殊拍以外でも「フツクチキ」は無声化を引き起こす可能性がある。

よって、現実には、(B)は-O' OOと-O' OOOに限定し、(A)は「前核化型特」を中心に据えて、その他に、無核化型、前核化型自を考慮するだけでほとんどのケースをカバーすることができる。

以上を踏まえて捉え直すと、(21)(22)は、実質的にそれぞれ(23)(24)のように書き換えられる。前核化型自は頻度が多くないと見て、括弧に入れた。

(23)が同アクセントになる場合で、5節の例の大半がこれに該当する。「前核化型

特」が決め手になっている。「前核化型自」が働いているのは、6節の(14)のガ行鼻音のいくつかの例と、先行研究の(3)の例である。

(23)	A1	A2	B3	B4	複合名詞
1)	前核化型特 (前核化型自)		-O'OO		: -③型
2)		前核化型特		-O'OOO	: -④型

一方、アクセントに違いが出る場合は(24)であるが、この中で有力なのは、(A)が無核化型の1)のケースである。これに該当するのが3節の(8)である。そこで見たものは、「短い無核化型」と「長い一般型」とのペアにおける対立であった。先行研究の(1)と(4)の例もこれである。4節の(10)もそうである。

(24)	A1	A2	B3	B4
1)	無核化型	無核化型	-O'OO	-O'OOO
2)	(前核化型自)		-O'OO	
3)	(前核化型自) (前核化型自)			-O'OOO

(24)には「前核化型特」がない点が注意を引く。(9)において、a)の「前核化型特」の対としてb)に出ているのは「短い形」ばかりで、Yが「長い形」の一般タイプは実例がほとんど得られていなかったが、それも偶然ではなかったことになる<18>。

これを要するに、理論的な可能性としては語構造の違いがアクセントに反映される組み合わせが多くても、実際の諸制限を考慮するとアクセントに反映されない組み合わせの方が多くなり、実例に基づく考察を裏づける結果が得られると考える。

[注]

<1> この後、氏の論は規則の循環適用へと展開するが、この点は本稿で取り上げない。

<2> これは、続く川上(1994:33)と同様、「町の音声学」として面白い現象を取り上げた囲み記事的なもので、ペンネームで書かれているが、川上薬氏の筆になることを確認済みである。

ちなみに、川上氏は(4)の区別につき、「(東京語、その他おそらく多くの方言で)」と注記をしている。これを承けて、私の岩手県雫石町方言のデータを示しておこう。

(1)の1),(3),(4),(5)のいずれのペアもアクセントの区別はなく、(3)は⑤で、残

りはすべて③。(1)の2)も両方とも③だが、「神学科」のみ⑤も可か。
ただし、語音面で、(1)の2)は後述の(7)に対応する[ŋ]と[g]の区別があり、(3)も次のように発音し分ける。すなわち、

/ 'osjogu~zu'keN/(お食事券) と / 'osjoguzu'keN/(汚職事件)

で、語構造の差が前鼻音化の有無による差で出ている。もつとも、前者のオ- の付く形は、まず使うことがない。オ- のない形も稀だが、食堂などで書いてあれば使うこともあろう。いずれにしても、「食事」で ~ のない形は不可。

<3> 窪菌・川上両氏の例が本稿をまとめるきっかけになったが、この問題に対する関心は、10年ほど前にアクセントデータベースを作り始めた段階で、境界(切れ目)をどのように入れるかという問題に突き当たったとき以来もっていたものである。拙文(1985:251)にも「名文集」の二義などの注記をしている。

<4> 語構造の切れ目の認定によっては、“連母音”——ここは総称として用いている——が、二重母音(1音節)であるかヒアトゥス(2音節)であるかの相違が生ずる可能性もあるが、この点は問題にしない。また、直前の切れ目の有無に応じて変わらうる、有声破擦子音やガ行口音子音の破裂性の度合いについても、音声レベルの現象と見て取り上げない。

<5> 使っている辞書ソフトは「松茸」で、パソコンを始めた7年前から一貫して使用している。ただ、日々“調教”を続けているので、最初のうちはいろいろ面白い例が得られたが、最近ではほとんど“収穫”がなくなってきた。辞書に初期登録されている語例も関係するので、このやり方には個人による偏りが避けられないが、本稿の論旨には影響がないものとする。もちろん、本稿の最終章で、対立の可能性について理論的な検討を加え、偶然に支配されないように努める。

関連して、認識のあり方に関わると思われる経験を記しておく。該当項目に気がつき次第、変換の途中でもメモを取るようにしたつもりであるが、後回しになることも多く、そのために半永久的に消え去ってしまったものも少なくない。その日の入力有一段落した後でいくら見直しても、別の切り方の可能な例がどこにあったのか、どうしても見つけられないことが多かった。自分の意図した意味に漢字で確定されてしまうと、他の分析の可能性が見えなくなるものらしい。

<6> 教示者は、東京大学言語学研究室の風間喜代三先生、土田滋先生、菊地康人氏、そしてその時々院生・学生諸氏である。御礼を申し述べる。ただし、組織的な調査ではなく、10年ほど前から折に触れて聞いたので、期間も項目も人数もばらばらである。教示者の年齢にも幅がある。他地域の「方言調査」で取っている方針とは著しく

異なるが、本稿の目的にとって大きな支障はないと考える。普段使うことのない特殊な用例を聞いたための不備があるとすれば、もとより私の責任である。

ガ行子音については、鼻音形が出たものはそれを積極的に採用した。若い世代でしかチェックしていない項目は、[ŋ]の判断材料にならないので、やむをえず私自身の発音でそれを決めた。無謀とのそしりを受けるかもしれないが、東京の年配者の発音との間に有意な違いはないと思つての処置である。

私にとり[gV]と[ŋV]はまったく別の音で、「この小学[ŋ]校は中学[g]校で、あの中学[ŋ]校は小学[g]校だ。その隣の高等学[g]校は大学[g]校だ。そしてその向こうには防衛大学[ŋ]校がある。」は、完全に文法的である。[g]で発音する「小/中/大学校」は学校の規模を言う。「防衛大学校」は上京後しばらくしてから活字を通して知つたが、意味も構造も不明で、[g]か[ŋ]か分からなかつた。ただそれだけの理由で、長いことこの単語を口に出すことができない期間が続いた。[ŋ]だと知つた時のほつとした気持ちは忘れられないくらいである。なお、「高等学校」は、私の郷里でも明治生まれの人は[ŋ]と言つていたが、私には古くさく感じられる発音である。

<7> 1単位形と2単位形の違いは、両形が併存している次の「日本語音声概説」の例を参照。「|」を含む方が2単位形で、ここでアクセント単位が切れている。(これは川上葵氏の著書からとつた題であるが、2単位形の1)が氏の意図であるという。)

構造	アクセント	アクセント単位
1) [日本語音声+概説]	ニホンゴ°オ'ンセイ ガイセツ ^ˉ	2
2) [日本語+音声概説]	ニホンゴ° ^ˉ オンセイガ'イセツ	2
3) [日本語音声+概説]	ニホンゴ°オンセイガ'イセツ	1
4) [日本語+音声概説]	ニホンゴ°オンセイガ'イセツ	1

これは、“同じ”複合語が2通りに解釈できる内部構造をもち、それに対応する発音の仕方は、2単位形が2種類、1単位形が1種類の3通りある例となる。1)と3)、2)と4)はそれぞれ同じ構造であるが、アクセント単位数はそれぞれ2、1で異なっている。これを別の観点から見ると、2単位形の1)と2)では、切り方(構造)に応じてアクセントも異なっているのに対して、1単位形の3)と4)では、切り方にかかわらず同じアクセントとなっている。この1単位形からは構造の特定化ができない。

2単位専用形をヘアの一方にもつものは本稿では取り上げないので、

ト'ー|チ'ホ'ー(当地方) トーチ'ホー^ˉ(倒置法)

ド'ー | ソーカイ^ー (同總會) ドーソ'ーカイ (同窓會)
 エ'キ | ショーメ'ン (駅正面) エキショ'ーメン (液晶面--ディスプレイ)
 ハ'ン | タイセ'イメイ (反体制名) ハンタイセ'イメイ (反対声明)

などは対象外となる。

<8> この作業中に、(11)に相当するケースはどちらにしても同じアクセントになること、そしてそれが非常に多いという事実に福井玲・白川俊の両氏がいち早く気付いたことを記しておかなければならない。10年ほど前のことであった。

方言によっては、そのアクセントから構造が判定できる項目がある場合もある。しかし、それを直ちに他方言に適用できるという保証もなく、アクセントデータベース一般としての境界(構造)の課題は依然として残っている。現実には国語辞典を参照しながら決めたりしているが(「強行軍」を[強+行軍]とするなど)、辞書自体が何を論拠としているか不明である。話し手の共時的な意識--これにも個人差がある--と食い違うこともある(私自身の意識では、「サンタク+ロース」⑤、「清少+納言」⑤、方言では⑥である)。本稿における複合語内部の構造認定についても、異論の出る項目があるかもしれない。結局、最初からすべての項目の語構造が確定された形で与えられているのではなく、実際のアクセントデータと照らし合わせながら、柔軟に対応していくしかないものとする。

<9> ちなみに、私の方言では[新+人類]は③、[新人+類]は⑤で区別がある。

<10> 29)のペアは執筆段階で思いついたもので、インフォーマント調査はしていないが、幸い、秋永一枝(1981)に両方が出ている。そのアクセントは「能楽師」は④③、「農学士」は③④と優先順位が異なり、前者には無声化によるずれ、後者には「3つ以上の語が複合した結合名詞」の参照番号が付いている(「神学校」も同番号付き)。後者の該当箇所は、おそらく「前・後部に分かれにくい語」であろう。そこには「国文学」③、「文学部」④③の例も出ている。なお「学士」は①で「古は@」とある。

<11> 以下の例には、話者に当たっていない項目が一部含まれている。「何回戦」が[何回+戦]であるかぎり、これを@型で言う人がいるかもしれない。

<12> 数年前、「天王星」がニュースになった時に、いろいろのチャンネルで@型アクセントを耳にしたが、「天皇制」に聞こえてしかたなかった。ちなみに、私の方言では「天皇制」⑤、「天王星」③である。5)と6)も同様に、a)は⑤型、b)は③型。

<13> 関連させて言えば、文法論や意味論での「非文」を音声化する場合も、アクセントはそれぞれの語彙項目に適切な形で付与される。非文の「明後日見た」も/アサ' ッテ ミ' タ/以外にはありえない。仮にこの言い方が気になる人がいたら、「明後

日見た」は文法的に間違いである。」という文を考えてみればいい。引用句にすれば、問題はなくなる。例の/イロノ ナ' イ ミ' ドリノ シソーガ モーレッツニ ネムッタ/も、意味的に変だからといって/イロノ' ナイ ミドリノ シソ' ーガ モーレッツ' ニネ' ムッタ/などとは決して言わない。そもそも、そういう発音は普通の人にはできないはずである。

<14> 単独形との関係は、Yが2拍の和語の時に、頭核化型は単独でも①型のものに限る、無核化型は単独でほとんど②型のもの、と言えるだけで、ともに逆は成り立たず、個別に辞書レベルで指定するしかない。したがって、(20)のように単独形を示すことはできない。

<15> 例えば、A1の無核化型の…OM・O⁻や前核化型特の…O' M・Oは、B3の-○○' Oと対立しそうに見えるが、同じ語音条件のB3なら-O M' Oのはずで、この特殊拍に核がくる形がないと考えられる以上、これらの対立も存在しないものとする。

<16> ただし、私のアクセントデータベースには、残念ながら、東京方言の資料は入っていない。著作権のことが気になって、アクセント辞典のデータをそのまま取り入れることを控えたからである。したがって、今具体的な数値をあげることはできず、経験に基づく発言にならざるを得ないが、秋永(1981)の詳細な「東京アクセントの習得法則」にも、本稿にいう(A)と(B)について、それぞれ「一般グループ」と「特殊グループ」の区別が設けられている。以下の論は、主としてこの「一般グループ」に関するものである。

<17> 2拍2字漢語は①型を保つが、それゆえに一般に「長い形」として扱われる。

<18> 手元に集まった例では、「基地外」②型に対する「気違い」③型がYが3拍の珍しい例であるが、そのアクセントは例外的である。

[引用文献]

秋永一枝(1981)『明解日本語アクセント辞典』第2版、三省堂

上野善道(1985)「アクセント調査語彙用参考資料——「体言篇(2)」の補遺——」アジ
ア・アフリカ言語文化研究所『文法研究』13, 119-323

上野善道(近刊)「複合名詞から見た日本語諸方言のアクセント」三省堂

川上 薬(1994)「シンシントー」町の音声学 52, 『音声学会会報』207, 4

川上 薬(1994)「ゼーアール」町の音声学 54, 『音声学会会報』207, 33

窪菌晴夫(1993)「日本語複合語における平板化形態素の作用域について」大阪外国語
大学『日本語・日本文化研究』3, 9-18

窪菌晴夫(1995)『語形成と音韻構造』くろしお出版

[付記] 本稿は、1995年7月に東京都立大学の集中講義で話したテーマの一部を詳しくしたものである。機会を与えて下さった小林賢次先生をはじめとする国語学研究室の方々、ならびに日本語研究会の編集部の方々に御礼を申し上げる。

(うわの ぜんどう・東京大学教授)